



一般社団法人 日本病理学会
〒101-0041
東京都千代田区神田須田町 2-17
神田 IN ビル 6 階
TEL: 03-6206-9070
FAX: 03-6206-9077
E-mail: jsp.office@pathology.or.jp
<https://pathology.or.jp>

一般社団法人日本病理学会

第 449 号

令和 7 年 (2025 年) 9 月刊

1. 一般社団法人日本病理学会令和 7 年度秋期特別総会
のご通知 (正会員各位)

来る令和 7 年 11 月 13 日 (木) 18 時 30 分より 20 時 00 分まで名古屋コンベンションホール (名古屋市) に於いて、一般社団法人日本病理学会令和 7 年度秋期特別総会 (社員総会) を開催いたします。下記事項の審議となりますので、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

また諸般の事情により予定が変更となる場合は HP にて速やかにお知らせをいたします。会員におかれては会員システムからのメール配信等とあわせてご留意いただけます。

記

議題

1. 令和 6 年度事業報告ならびに収支決算の件
2. 令和 8 年度事業計画ならびに収支予算の件
3. その他

以上

2. 乳癌患者における HER2 超低発現の保険収載に
関する運用とお願い

HER2 免疫組織標本作製に関して、2025 年 9 月 1 日にコンパニオン診断薬 (ベンタナ ultraView パスウェー HER2 (4B5)) による「トラスツズマブ デルクステカン (遺伝子組換え)」[以下エンハーツ] の「超低発現」に関する保険収載がなされました。

患者に適切な治療が適切なタイミングで施されるために、各医療機関の病理診断医および乳癌診療を行う臨床医に、日本病理学会として以下をお願いいたします。

当面は、検査の遅延、病理医の負担等を考慮し、可能な限り「エンハーツの使用」を考慮する場合に限定して、HER2 超低発現の病理診断をご依頼ください。

なお、「第 13 部 病理診断 N002 免疫染色 (免疫抗体法) 病理組織標本作製 3 HER2 タンパク」に関しては、HER2 低発現も含む告示が改定になっておりますため、この度保険収載されました HER2 超低発現のみならず、HER2 低発現に関しても言及いたしました。

詳細は以下 HP よりご確認ください。

<https://www.pathology.or.jp/news/members/iryu-gyoumu/20250912.html>

3. 第 21 回日本病理学会カンファレンス開催報告
P2 から P16 をご参照ください。

4. 2024 年度ハンガリー PMiP 体験記
P 17 から P 20 をご参照ください。

5. 会員の訃報

以下の方がご逝去されました。

安水 良知 元学術評議員 (令和 7 年 8 月 18 日ご逝去)

難波 紘二 元学術評議員 (令和 7 年 9 月 23 日ご逝去)

第21回日本病理学会カンファレンス開催報告

世話人：愛媛大学医学部解析病理学講座 増本 純也

1.開催の目的と概要

2025年7月25日(金)～26日(土)、愛媛県松山市のリゾートホテル「奥道後温泉 壺湯の守」にて、第21回日本病理学会カンファレンスを開催いたしました。本カンファレンスは、2019年度までの第16回までは1泊2日の合宿形式で開催されておりましたが、コロナ禍の影響により、2021年度はオンライン形式、2022年度は宿泊を伴わない対面形式へと変更されました。その後、2023年5月の新型コロナウイルス感染症の5類移行を受け、札幌医科大学の鳥越俊彦先生のご尽力により、函館・大沼にて2泊3日の合宿形式が復活いたしました。



第21回
日本病理学会
カンファレンス

テーマ
組織細胞傷害による疾病の理解

7/25_(金)-26_(土) 2025

奥道後温泉 壺湯の守

世話人 増本 純也

愛媛大学医学部 解析病理学
プロテオサイエンスセンター 病理学部門

開催概要(合宿形式)

特別講演
教育講演
一般演題(ポスターのみ)
茶室夜咄

生体学習単位について
日本専門医機構専門医資格更新単位(病理領域講習単位)4単位
病理専門医受講資格

お子様連れの参加大歓迎
参加登録時にお申しください
親子休憩室/託児室

一般演題登録締切
6月2日(月)正午
参加登録締切
6月9日(月)正午

事務局：愛媛大学医学部解析病理学講座
〒791-0295 愛媛県東温市志津川454
TEL: 089-960-5977 / 089-960-5271
E-mail: 21jpc@m.ehime-u.ac.jp

オフィシャルホームページ
<http://square.umin.ac.jp/jpc21/>

しかしながら、「2泊3日は日程的に長すぎる」「若手医師にとって合宿形式は参加のハードルが高い」「夜通しの懇親会は時代にそぐわない」といった反省点も挙げられました。これを踏まえ、2024年度は山形大学の二口充先生が、会場と宿泊施設を分けた非合宿形式で1泊2日の開催を試み、また、初めてご家族でも参加できる『親子休憩室』を設置して好評を博しました。今回の開催にあたっては、これまでの経験をもとに、合宿形式の利点と1泊2日を融合させ、病理医の先生方が親子で参加できる親子休憩室を設けた「いいところ取り」のスタイルで、従来の合宿形式を復活させました。レクチャー講演・特別講演は、将来を担う若手の先生方にご担当いただきました。

当日は、現地参加者53名、ご家族も含めて計58名のご参加を賜り、非常に賑やかで充実した会となりました。参加者の多くが若手であったことから、開会のご挨拶では、日本病理学会理事長であり九州大学形態機能病理学教授の小田義直先生より、同世代の参加が少ないことに若干の戸惑いを感じたとの率直なお言葉もありましたが、研究マインドの低下に対する危機感を背景に、病理学会が率先して若手のリサーチマインド涵養に取り組む重要性について熱く語っていただきました。18演題のポスター発表も加わり、伊予松山の奥道後という交通の不便な田舎での開催であったにもかかわらず、多くの先生方にご参加いただけたことに心より御礼を申し上げます。

近年、ゲノム医療の推進、遺伝子やタンパク質のシングルセル解析、空間プロテオゲノミクスの発展、デジタルパソロジー技術の進展など、病理学に関連する領域では目覚ましい進歩がみられます。病理学会カンファレンスとしても、こうした“流行”を追う姿勢は重要ではありますが、今回はあえて「病理学総論」の原点に立ち返り、テーマを「組織細胞傷害による疾病の理解」といたしました。

まず冒頭では、世話人の増本より、ロビンスの『基礎病理学』を題材に、組織細胞傷害による細胞死、炎症、再生と修復、DNA損傷といった、病理医として『あたりまえ』の基本事項の復習と、講演の概要紹介を行いました。初日には、3題のレクチャー講演に加えて、一般演題のポスター発表と討論の時間を設け、最後に特別講演を行いました。



レクチャー講演 1 の 1 題目は、本年 4 月 1 日付で徳島大学教授に就任されたばかりの常松貴明先生より、「がん細胞が死細胞を捕食することで増殖能が高まる」という興味深い現象についてご講演いただきました。ちょうど『鬼滅の刃 無限城編』が話題となっている時期でもあり、時代を感じるタイムリーな内容だったと（世話人としては）感じています。2 題目では、山口大学教授に内定されている島根大学の荒木亜寿香先生より、「微小管修飾に関与するタンパク質の 1 アミノ酸変異によってプルキンエ細胞が細胞死を起こす疾患について」ご講演いただきました。細胞骨格を長く保つことの代償として傷害が生じやすくなることを再認識させられる内容でした。3 題目は、東京科学大学に着任されて新進気鋭の石川文彦先生に、「ゲノム傷害による白血病の多様性と再発予防のための戦略について」、最新の知見を含めて講演をいただきました。

一般演題 18 題はいずれもポスター発表にさせていただきましたが、ポスター発表だけでは勿体無いほどの秀逸な内容が揃いました。

その後の特別講演では、本年 4 月 1 日付で愛媛大学教授に就任されたばかりの村井純子先生に、「細胞傷害性抗がん剤の効果と高い相関を示すタンパク質「SLFN11」の分子機構について」最新データを交えてご講演いただきました。

ここで改めて確認させていただきますが、本カンファレンスが目指すのは、若い学生や病理医に対して、研究の面白さを伝えるとともに、診断にも活きる“未知への探究心”や“広い視野”の重要性を訴え、多様な研究背景をもつ病理学者（医）との「密な親交」の場を提供することです。

今回、過去に「夜通しの懇親会は時代にそぐわない」とのご指摘があったにもかかわらず、あえて“夜咄（よばなし）”という茶室での『呑みニケーション』の場を設定したところ、予想以上に多くの先生方にご参加いただき、夜が更けるまで語らうひとときを持つことができました。やはり 1 例報告のエビデンスレベルは“F”であるという現実を再認識した次第です。今後の世話人の先生への参考になれば幸いです。



2 日目は、3 題のレクチャー講演を行いました。

レクチャー講演 2 の 1 題目は、2020 年に日本病理学会 100 周年記念病理学研究新人賞を受賞者の徳島大学松本穰先生より、「多様な組織構築を模倣する胸腺癌の病態を、シングルセル解析により詳細に解明した研究成果について」ご講演いただきました。2 題目は、福島県立医大講師から札幌医科大学准教授にご昇任されたばかりで、2024 年の日本病理学会学術研究賞(A 演説)受賞者の杉本幸太郎先生に、「病理学総論における再生と修復および遺伝子組換え技術についての丁寧な解説に続き、ゼブラフィッシュを用いた再生修復研究について」ご紹介いただきました。3 題目では、2021 年日本病理学会学術研究賞(A 演説)受賞者の大阪大学の野島聡先生より、「組織傷害の理解に貢献する透明化技術と、それを応用した研究について」ご講演いただきました。

いずれの講演も、本カンファレンスのテーマである「組織細胞傷害による疾病の理解」にふさわしい、期待を超える内容ばかりでした。

最後に、研究推進委員会を中心とする座長およびディスカッサーによる一般演題の採点結果をもとに、最優秀演題賞および優秀演題賞の表彰を行いました。当初、優秀演題賞は 2 題を予定しておりましたが、3 題が同点であったため、最優秀演題賞 1 題、優秀演題賞 3 題を選出いたしました。

本カンファレンスの講師、演題名、座長および表彰演題の詳細は以下の通りです。(敬称略)

7 月 25 日 (金)

レクチャー講演 1

座長：菰原 義弘 (熊本大学)、二口 充 (山形大学)

●常松 貴明 (徳島大学大学院医歯薬学研究部口腔病理学分野)

「“がんの共食い” から挑むがんの本態解明への挑戦」

●荒木 亜寿香 (島根大学医学部附属病院病理部)

「神経変性疾患を病理から紐解く：組織細胞傷害の連鎖と再生の可能性
— モデルマウスを用いた未来へのアプローチ —」

●石川 文彦 (東京科学大学医歯学総合研究科包括病理学分野)

「難治性血液疾患の理解と克服」

●一般演題(ポスター)

ディスカッサー：荒木 亜寿香 (島根大学)、鳥越 俊彦 (札幌医科大学)、
小林 基弘 (福井大学)

発表・討論 18 演題

特別講演

座長：増本 純也 (愛媛大学)

●村井 純子 (愛媛大学プロテオサイエンスセンターがん制御部門)

「SLFN11 でがん化学療法にもプレシジョンメディシンの道を開く」

8 月 5 日 (土)

レクチャー講演 2

座長：菰原 義弘（熊本大学）、二口 充（山形大学）

●松本 穰（徳島大学大学院医歯薬学研究部分子病理学分野）

「バイオインフォマティクスで読み解く胸腺腫瘍」

●杉本 幸太郎（札幌医科大学医学部病理学講座）

「幹細胞を移植しない組織再生戦略」

●野島 聡（大阪大学大学院医学系研究科病態病理学）

「3 次元イメージングによる組織傷害の理解」

<最優秀演題賞>

●高島 剛志（大阪大学大学院医学系研究科病態病理学講座）

「特発性肺線維症において発現増加する long non-coding RNA MIR205HG は IL33 発現を制御する」

<優秀演題賞>

●杉田 佳祐（がん研究会有明病院病理）

「デジタル PCR と人工知能画像解析を応用した肺浸潤性粘液性腺癌と臍癌肺転移の鑑別」

●重原 研吾（札幌医科大学病理学第一講座）

「The size of CD8+ infiltrating T cells is a prognostic marker for esophageal squamous cell carcinoma」

●藤原 章雄（熊本大学大学院生命科学研究部細胞病理学講座）

「リンパ節への効率的な IFN α の送達による免疫賦活化を介した腫瘍抑制作用」

最後に、次回開催の世話人である熊本大学大学院生命科学研究部細胞病理学講座教授の菰原義弘先生より、次回開催のご案内をいただきました。

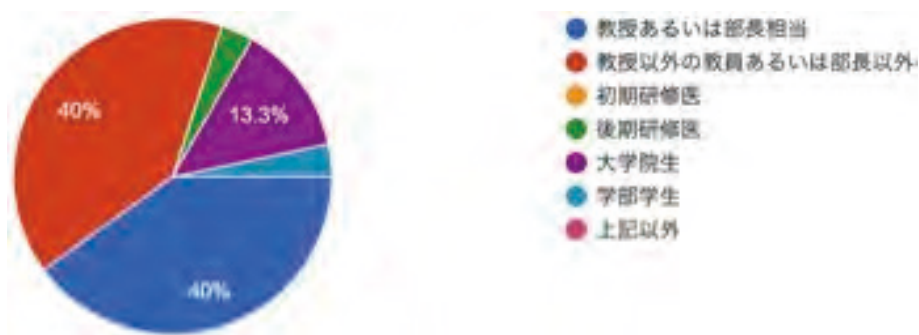


2. アンケート結果(令和7年8月31日現在)

以下にアンケート結果をまとめております。現在までのところ回答者は30名でした。今のところ全員の回答者に「日本病理学会カンファレンスに参加してみたい」と思っていただけたことを、大変うれしく思います。

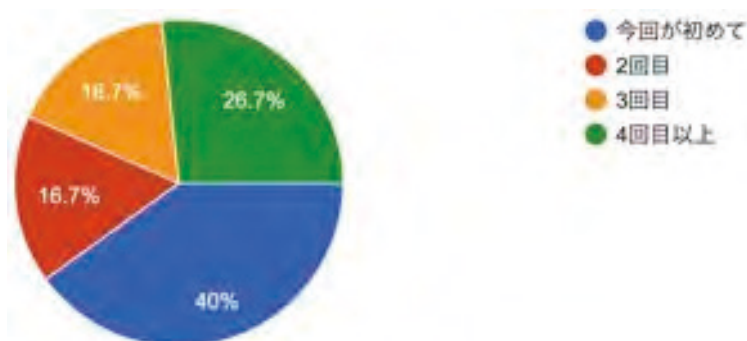
●御所属の属性をお答えください

教授あるいは部長相当	12
教授以外の教員あるいは部長以外の部局員相当	12
初期研修医	0
後期研修医	1
大学院生	4
学部学生	1
上記以外	0



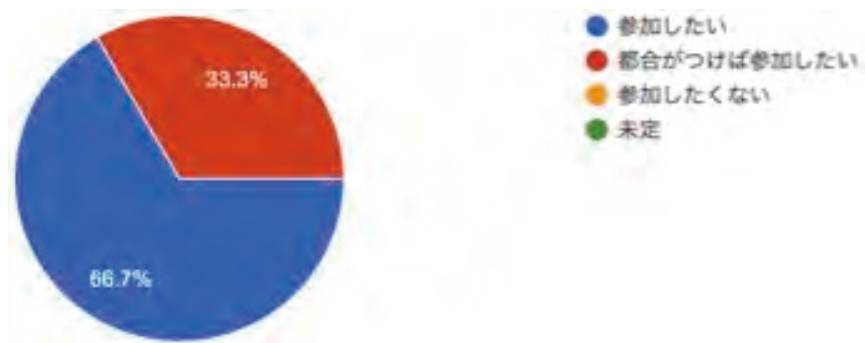
●病理学会カンファレンスへの参加回数をお答えください

今回が初めて	12
2回目	5
3回目	5
4回目以上	8



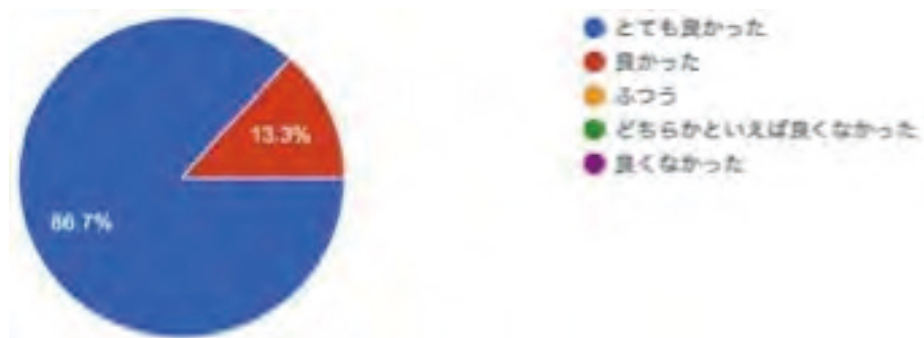
● 次回の病理学会カンファレンスに参加したいですか？

参加したい	20
都合がつけば参加したい	10
参加したくない	0
未定	0



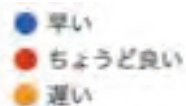
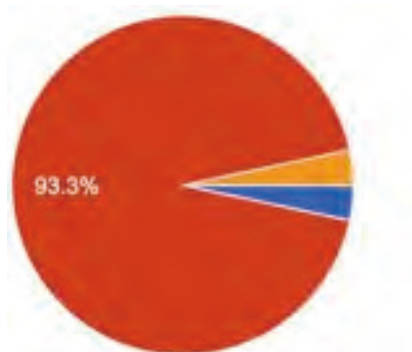
● 今回のカンファレンスは全体を通じていかがでしたか？

とても良かった	26
良かった	4
ふつう	0
どちらかといえば良くなかった	0
良くなかった	0



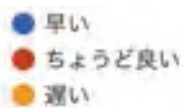
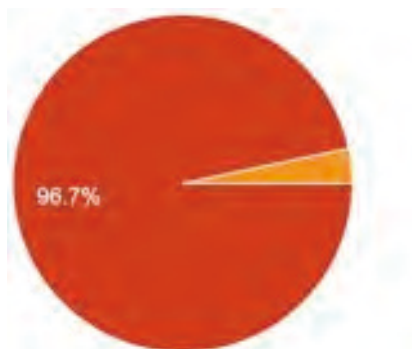
●演題締切日について

早い	1
ちょうど良い	28
遅い	1



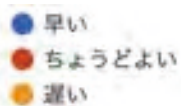
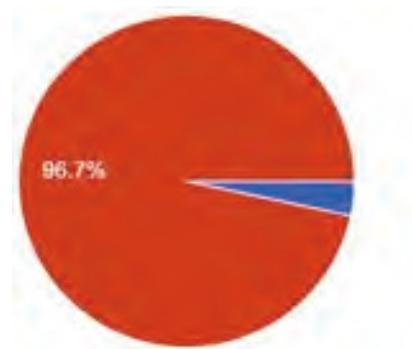
●参加登録締切日について

早い	0
ちょうど良い	29
遅い	1



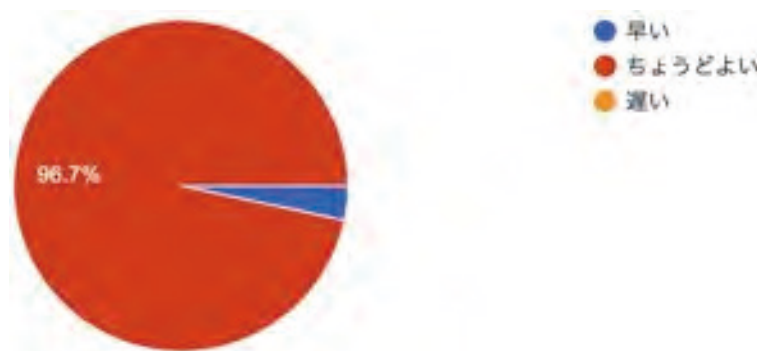
●開始時間について

早い	1
ちょうどよい	29
遅い	0



●終了時間について

早い	1
ちょうどよい	29
遅い	0



●開催時期と期間(長さ)について(自由記載)

- ・全国各地から参加者がいらっしゃるのでその年の開催場所による
- ・松山を散策する時間があり、ちょうどよかったです。時期については日本がん免疫学会と重なってしまったのが残念でした。
- ・いずれも、丁度良いと思います。
- ・(そもそもの想定参加層でない気がしますが、)一般病院勤務医に平日開始は厳しくなるのは仕方ない
- ちょうどよい。

- ・2日間というのはちょうど良い期間と存じますので今後もこの通りでよいかと思います。
- ・地方からの移動する方々には午後1時スタートは少々きついかもかもしれません。

ちょうどよい

- ・今回の開催時期は7月下旬でしたが、これくらいの時期は非常に参加しやすいです。期間も長すぎず短すぎない丁度良い長さでした。

●プログラム(タイムテーブルやポスター)について(自由記載)³⁰ 件の回答

- ・ポスターをもう少し増やすことができれば良いですね。
- ・適切だったと思います
- ・素晴らしいプログラムでした。大変勉強になりました。

- ・講演がもう少し多い方がよい
- ・ポスター発表は A-C にわかれていたのはよいですが、他のグループの話は全く聞けませんでした。発表時間とは別に、ポスターについて発表者本人から話を聞ける自由時間などがあったらよかったです。
- ・今回のようにポスター発表もあった方がよいと思います
- ・ポスター発表はもう少し長くていい気がしました。6 分など。
- ・ポスター賞の対象が若手以外も対象であり、他の学会などと異なっていて良いと思った
- ・good
- ・よかった
- ・テンポがよくあつという間でした。温泉に行ける余裕があつて良かったです。
- ・ポスターセッション後の交流の時間がもう少し欲しかったです。
- ・ちょうど良い。勉強になったし、くつろげた。
- ・質疑応答の時間が十分にあったのでよかったです。
- ・ポスターを見る時間があまりなかった。
- ・適切であつた
- ・討議も活発で、とてもよかったです。
- ・ちょうど良い時間だったと感じました。
- ・ポスター発表は座長の先生進行の発表形態だけでなく、自由時間(個別の発表／討論)も設けた方がよいと感じました。
- ・スムーズでした
- ・ポスター発表のタイミングや講演の長さはちょうど良かったです
- ・ポスター採点は、割合(1-5 点を何件づつにするか)を決めた方が良かったのではないかと思います。
- ・その時の世話人先生の特徴が出る形がよく、今回も良かったです。
- ・2 日目の朝はもう少し開始が遅くても良かったかなと思いました。
- ・今回はゆったりとしていて楽でした。
- ・ちょうどよい
- ・ちょうど良い時間配分でした。
- ・わかりやすかったです
- ・時間にゆとりのあるタイムテーブルで非常に良かったです。空いた時間に先生方とお話することができ、気になったことを忘れる前に聞きに行くことができました。
- ・閉会後の臨床細胞学会の参加費に割引特典があると参加を検討していたかもしれません。

●会場について(自由記載)

- ・奥道後よかったです
- ・昭和を感じられてよかった
- ・申し分なく、素晴らしい会場でした。風景も、温泉も、会場の設備も、サービスも。
- ・豪華で驚いた
- ・美味しい料理も出て、あの安さで驚きました。とても良かったです。
- ・合宿形式・非合宿形式、どちらの選択もあっても良いと思います
- ・とても良かったです。
- ・合宿形式だったので、夜咄も含め、様々な先生方と交流できて良かった
- ・good
- ・良い場所だった
- ・歴史を感じさせる良い雰囲気の旅館でした。露天風呂も最高でした。
- ・大変満足でした。
- ・奥道後を知ることができた。この規模の研究会にはもってこいの会場でした。画質も良かった。
- ・広くて快適な会場でした。(階段がやや不便でした。)
- ・とても良かった。
- ・とても雰囲気がよく良かった
- ・道後温泉にはじめて行きましたが、とてもよかったです。本会がよい機会になりました。
- ・街からのアクセスも良く、なによりも掛け流しの温泉が素晴らしかったです。
- ・満足
- ・総じて安く、ありがたい
- ・温泉がよかったです
- ・同じホテルに宿泊する合宿タイプが良いと感じました。温泉や食事も含めた会場が素晴らしいと思いました。
- ・都心部ですと、なかなか合宿形式も難しく、一方で別途会場を確保しますと予算もオーバーすると思いますので、質素ですが、大学を使用する、というのも今後是一种の方法かもしれません。
- ・とてもよかったです。
- ・楽しめました。
- ・非常に良かった
- ・露天風呂がとてもよく、リフレッシュすることができました。

- ・とても広くてのびのびさせていただきました
- ・とても過ごしやすい会場で、シャトルバスもあった為、不便に思うことはありませんでした。また、他の利用客が少ないため外で話すことに躊躇わなくて済みました。リラックスして参加できる良い会場だったと思います。
- ・旅館自体のサービスは100点満点ですが、マイクロバスの台数が多いとより良かった。

●レクチャー講演・特別講演の講師の選定とテーマについて(自由記載)

- ・若い病理医に夢のあるテーマ
- ・今回のように日頃聞けない主催者の先生に関係する講師の先生がよいと思います
- ・普段、聞くことのできない講演があり、良かったです。また、若手の講師が多く、素晴らしい内容でした。
- ・がんの空間解析などに偏重していなくてよかった
- ・ご高名・新進気鋭の方々(病理学会での受賞者が多かったように見受けました)から、最新の成果を聞くことができ、大変刺激になりました。素晴らしい選定だったと思います。
- ・講師とテーマについては、世話人の意向に任せるのが良いと思います。
- ・知らない分野を知ることができたので、ちょうど良かったです。
- ・組織傷害・修復の観点から多様な講演が聞けて良かった
- ・とても有益な内容でした
- ・非常にレベルの高い講演を聞くことができて非常に良かった
- ・専門領域が異なる者にもわかりやすく講義してくださり、非常に勉強になりました。
- ・どの先生方のご発表も興味深く、研究に興味を持ちました。
- ・独立したての研究者たちの経歴やステップを知ることができるのは、若手にとって良いこと。今回の演者たちは、みなさんそういった感じで、個性的で、芯があって良かった。
- ・レクチャー講演、特別講演ともにとても興味深く面白かったです。
- ・非常に勉強になった。
- ・テーマの棲み分けもできていてとても充実していた
- ・病理の会は腫瘍を扱うことが多いので、組織細胞傷害という腫瘍以外に門戸の開かれたテーマはとても良かったです。
- ・発表の間もゆとりのある時間で良かったです。
- ・今回の学会で初めて拝聴する研究内容も多かったので、勉強になり良かったです
- ・(個人的には)気になっている先生方でありがたかったです
- ・幅広い分野からのセミナーを聞けて良かったです

- ・若い方を中心に、愛媛の先生など、病理学会ではまだ話を聞いたことのない演者でよかったですと思います。ジェンダーバランスも考えられていると思いました。
- ・その時の世話人先生の特徴が出る形がよく、今回も良かったです。
- ・とても面白かったです。
- ・ポスターから1題取り上げる というのがあっても良かったかもしれません(若手)
- ・非常に興味深い内容で非常に良かった
- ・どのテーマも興味深く、勉強になりました。
- ・人選大変だったと思います。勉強になりました
- ・テーマを見て参加を決めましたが、期待していた以上に、自身の研究に繋がる成果を持ち帰ることができる内容でした。
- ・村井純子先生の SLFN11 の講演は内容に力強さがあり印象に深く残りました。

●親子休憩室・託児について(自由記載)

- ・良い企画でした
- ・開催日が土日や夏休みを含む場合はあった方が良いでしょう。
- ・今回は利用しませんでした。親子で参加できる事は大変ありがたいです。
- ・若い人に来てもらうためには必要だと思います。
- ・子供の声が聞こえる学会って、意外と気持ちが和みます
- ・お子様方がのびのび遊んでいらっやっったのを拝見して、スタッフの方々の心遣いが改めて素晴らしいと思いました

●別邸での夜咄について(自由記載)

- ・非常によいコミュニケーションができた。準備お疲れ様でした。
- ・広く整った会場、豊富なドリンクで深夜まで若い人たちと討論できて、楽しかったです。
- ・もう少し長くやってもいいのかな、と感じはしましたが、十分楽しかったです。
- ・お陰様で貴重な情報交換が出来ました。お酒も豊富にあり、道後ビール美味しかったです。
- ・道後ビールご用意くださりありがとうございました。堪能しました。
- ・とても良かった。
- ・準備や片付けなどが大変だったと思います。ありがとうございました。
- ・話し合いが深まり、良かったと思います。
- ・合宿形式でしかできないことであり、今回も盛り上げて良かったと思います。
- ・問題なかったように思います。

- ・親睦を深めるという点ではいいと思うが、今後のカンファレンスに必須ではないと思った
- ・いろいろな話を気兼ねなく存分に楽しめました
- ・夕食会場や、講演会場以上に和やかで話しやすい雰囲気であり、場所を移動して多くの先生と話せる良い機会でした。
- ・自分の研究に関して意見を頂いたり、キャリアの相談をさせて頂いたりとても充実した時間を過ごせました。ぜひこれからの病理学会カンファレンスでも実施して頂きたいです。

●その他全般について自由にお書きください(自由記載)。

- ・素晴らしい病理学会カンファレンスだったと思います
- ・あの参加費でこれだけの充実したカンファレンスを開催していただきましたことに、心より感謝と敬意を表します。ポンジュースと食事も美味しく、心に残るカンファレンスとなりました。増本教室の皆様のおもてなしに深謝申し上げます。ありがとうございました。
- ・ポスターの演題を登録した後に、採択の連絡をいただけると助かります(不採択はないのでしょうか)。職場への出張申請に際して、採択メールか、自分の名前の載っている抄録集などを提出する必要がある為です。
- ・すぐに良い案は浮かびませんが、学生・大学院生がもっともっと参加しやすい制度があっても良いかと思いました。
- ・増本先生をはじめ医局の皆さまありがとうございました。本当に楽しい会でした。
- ・たくさんの刺激をいただき勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ありがとうございました。
- ・あたたかいおもてなしありがとうございました。
- ・大変充実した会でした。増本先生はじめスタッフの方々に感謝します。
- ・病理学会カンファレンスに参加されるメンバー、大学が固定化しつつあると感じます。一方、他の学会や大学内での同様のイベント(リトリートや xxx 研究会、xxx&xxx 合同シンポジウム等)が多すぎる傾向にあるのも問題で、忙しい病理医や研究者が参加を躊躇するのも理解できる気もいたします。他のリトリートや xxx&xxx 合同シンポジウムでも議論されていることですが、隔年化、あるいは秋の病理学会への組み込みなど、コンパクト化を目指しても良いのかもしれない。
- ・お疲れ様でした。
- ・スタッフの皆さんご準備本当にご苦労様でした。何もかも楽しめたとても楽しい会でした。お疲れが出ませんように。

3. 総括

冒頭でも述べましたが、「もはや合宿形式は時代に合わない」という空気が漂う中、あえて“完全合宿形式”による 1 泊 2 日の病理学会カンファレンスに

挑戦いたしました。しかも、交通の便が決して良いとは言えない伊予・松山の奥道後という地で。テーマも「組織細胞傷害による疾病の理解」という一見マイナーな内容でしたので、若手・ベテランともに参加希望者が激減するのではないかと、大変危惧しておりました。

しかしながら、蓋を開けてみれば、若手の先生を中心に 53 名もの参加を賜り、相部屋での宿泊という合宿形式にもかかわらず、多くのポジティブなご感想をいただき、主催者として感激しております。また、講演内容についても多くの先生方から高い評価をいただき、大変嬉しく感じております（付度や配慮がありますので 100% 字面通り受け取ることはできませんが）。一方で、今回は日程が日本がん免疫学会など他の大学と重複したため、ベテランの先生方の参加が少なかったのは残念でした。しかしながら、准教授以下の若手教官、研修医、専攻医の先生方にとっては、いわゆる“相席ガチャ”や“相部屋ガチャ”を通じて思いがけない交流が生まれ、「呑みニケーション」を通じて多くの学びを得たと高い評価をいただけたことに、私自身も大きな驚きと感動を覚えました。なお、一般演題はすべてポスター発表といたしましたが、閲覧および討論のための十分な時間をどのように確保するかは、今後の課題と感じております。また、これまで参加者に占める女性の割合が少なかった点については、前回（世話人：山形大学二口充教授）、今回と親子休憩室や託児スペースを設けたことで、一定の改善が見られました。今後の開催においても、この取り組みを継続・発展させることが望ましい方向と考えております。

4. 謝辞

最後になりましたが、第 21 回日本病理学会カンファレンス開催にあたり、多大なるご支援を賜りました日本病理学会ならびに協賛いただきました団体・企業の皆様に心より御礼申し上げます。

また、遠方より伊予・松山までお越しくくださった参加者の先生方、貴重なご講演を賜りました講師の先生方、座長および選考委員としてご尽力いただき、さらに討論にも積極的にご参加いただきました日本病理学会研究推進委員会の先生方、遠路足をお運びいただきました日本病理学会理事長の小田義直先生、加えて、無償の差し入れで情報交換の場を華やかに彩りいただきました参加者全員の先生方に、深く感謝申し上げます。

そして、本カンファレンスの準備・運営および託児対応にご尽力いただいた愛媛大学医学部解析病理学講座の教員・スタッフ、関係者の皆様に、改めて心より感謝申し上げます。

1. 移動・宿泊・観光編

日本から Budapest (Hungary: Budapest Liszt Ferenc 空港) への直行便は就航していないので、どこかでトランジットが必要になります。仁川、Dubai、Munich、Frankfurt などが代表かと思いますが、他にも色々経由地があるみたいです。思いがけない経由地で航空機を格安にできることもあるため、比較サイト等で複数路線検索し、日程にゆとりを持つと移動費を抑えられるかもしれません。トランジットが不安な場合は Munich や Vienna などに降り立ち、そこから電車で行くという方法もあります。今年の参加者の吉田先生は、Munich から Hallstatt 湖などにも寄って観光しつつ、Budapest 入りされていました。今回私は Helsinki-Vantaa 国際空港（フィンランド）経由のフライトを選択しました。行きは東京を夜に出て、早朝の Helsinki を経て、昼に Budapest 着、帰りは昼に Budapest を出て、夜の Helsinki を経て、昼過ぎに東京着でした。東京～Helsinki 間は 13 時間程度のフライトで、そこでいい感じに寝るとちょうど時差が解消されるような旅程でした（時差は 7 時間）。

Helsinki 空港には熊本の誇るラーメン屋チェーンである味千ラーメンがありました。かつてローマの空港でもみかけたので、空港業界ではメジャーなのでしょうか？（ちなみに熊本空港には出店していません。）噂には聞いていましたが、フィンランドは非常に物価が高く、ラーメン 1 杯 20 ユーロ（約 3200 円）程度でした。話のネタになるので食べようかとも思いましたが、ラーメンに 3000 円も支払うことを私の魂が拒絶したため、結局食わず仕舞いでした。

Budapest Liszt Ferenc 空港は比較的最近建て直されたようで、綺麗なおもむきでした。CA さんやグランドスタッフもすべて英語対応してくれるため、ハンガリー語がわからなくても安心です（掲示板もすべて英語）。出発ロビーにはお菓子や酒などの主だったお土産が売っており、街で無理に買わずとも空港で問題なさそうです。

空港からホテルへと向かうにはタクシーが楽ですが、ブタペスト中心地までは 9000～10000 フォリント（HUF）程度、日本円では 3500～4000 円（1 HUF=2.56 円で換算）とやや値が張りました。空港から出たすぐ外に公式のタ



クシー受付があり、そこで行き先の住所を伝えと黄色いタクシーを呼んでもらえます（ここで呼ぶとボッタクリタクシーに乗ってしまう可能性を防げます）。その他、バスで向かう方法もあり、タクシーよりも安価で、こちらを選択している方もいました。私は面倒くさがりなので、タクシーを利用しましたが、バスを使っていれば、差額で味千ラーメンを食べれたような気がします。ホテルは AKEAH verdi という研修先である Semmelweis 大学の目の前で、尚且つ地下鉄の駅（Semmelweis Klinik 駅）もすぐ側にあり大変便利な立地でした。ホテルは大変綺麗で、受付の方の対応も大変良かったです。朝食はビュッフェ形式でした。研修前のウェルカムディナーもこのレストランで開催されます。洗濯できる設備はないので、自分で洗うか、近くのコインランドリーに行く必要があります（コインランドリーまで歩くと 15 分～20 分）。

今回は研修先の Kiss 教授からのご配慮で地下鉄のフリーチケットを頂けました。地下鉄で Budapest の繁華街や観光地まですぐに行けるので、しばしば利用していました。ハンガリーの地下鉄の駅にはチケットを通すような改札はないので、基本的に自由に出入りできるのですが、時折入り口でチケットのチェックが行われており、持っていないと高額な違反金を支払うことになるようです（たまにチェックする人をみかけます）。その他、ヨーロッパでは日本以上にスマートモバイル（日本で流通している Luup とは違い、Lime、TIER など）が普及しており、地下鉄で行くのに微妙な場所もスクーターで簡単に移動できます。Budapest はコンパクト

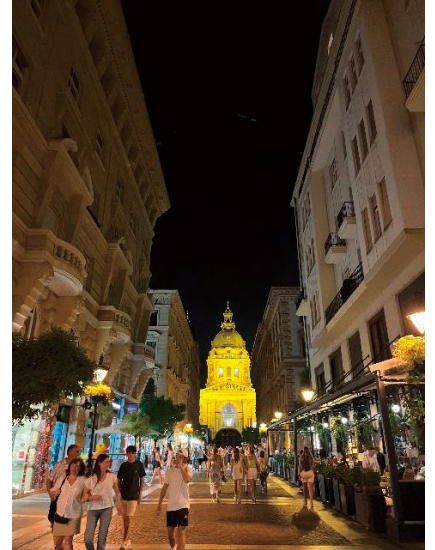


トな街なので、有名観光地へも地下鉄かスクーターで簡単に移動できます。

ハンガリーの人口は約 1000 万人で、200 万人ほどが首都の Budapest に住んでいます。主要な言語はハンガリー語です。勉強してみるのもいいですが、アジア人の顔を見るとほぼすべての人が英語で話しかけてくれるため、ハンガリー語の出番はありません。ハンガリー語の Yes は Igen というのですが、これは語感が妙に心地よく、ハンガリー人は Igen を連呼するため、真似して Igen, Igen, Igen と言いたくなります。フランクな挨拶は Szia ! (英語でいうところの Hi !) なので、街なかでは Szia ! を使ってみてもいいかもしれません (かなりフランクなので大学内では使えません)。名前の記載は姓名の順で、日本と同様のパターンであるため親しみが感じられます。文法上も語句の配置が自由であり (英語のように SVOC、SVO などの語順ルールがない)、日本語と語族の上で知られざる共通点があるのかもしれません。

Budapest はドナウ川を挟んで、西の Buda と東の Pest (ハンガリー語ではペシュトと発音します) からなる街で、夜景も含め大変美しい街です。人生で見た文化的な夜景で最も美しかったと明言できます。著名な観光地としては聖 Istvan 大聖堂 (地元では親しみを込めてバジリカと呼ばれていました) や Buda 城などがあります。個人的な感想としては、西ヨーロッパの首都 (パリやローマ) と比較しても豊かな観光地で、町並みは美しく、なおかつ人もあまり多くなく、物価も日本と同程度なので大変満足の行く観光ができました。

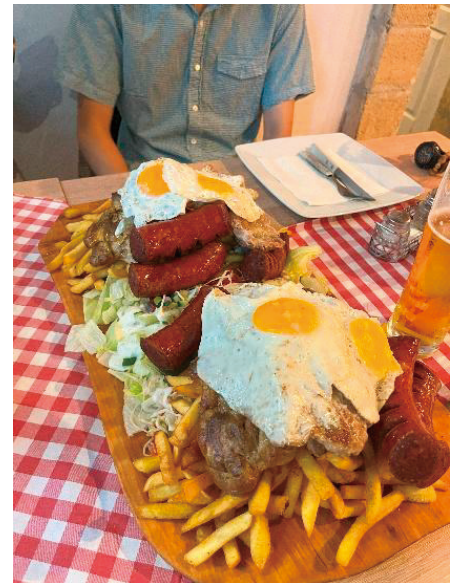
個人的に行って良かったのは、リスト記念館 (入り口がわかりにくい)、地下の迷宮 (入り口がわかりにくい) などでしょうか。ハンガリーは数学系の有名人が多く、20 世紀最大の天才の 1 人であるところのフォン・ノイマンもハンガリー出身で、生家が残っていました (中には入れませんが)。また、肌で感じたことですが、夜間帯でもかなり治安が良いと思います。



食事はグヤーシュというスープが 1 番有名なようですが、実際の街に行くと様々な国のレストランがあります。ハンバーガー、ケバブ、イタリアンなどの店が多い印象で、ジェラート屋さんも散見され、イタリアン系の食文化に近い印象でした。東アジアや東南アジアの料理を出す店もありました (日本語の看板につられて入ったラーメン屋は完全に中国料理屋さんで、ラーメンは激辛でした)。基本的にサーブされる食事の量が多く、日本の 1.5 倍量はあるので注文の際は気をつけた方が良いでしょう。アルコールに関してはワインが有名です。特にトカイの白ワインが名物で、お土産としても至る所で売っています。



我々も数人で近くのワインショップに行き、それぞれの医局のバスにお土産を購入して帰りました。また、嬉しい誤算だったのがビールが美味しいところでした。比較的あっさりとした味わいのラガービールが有名で暑い季節にちょうどよかったです。その他ここ近年はマイクロブルワリーが増えており、いわゆるクラフトビールと呼ばれる IPA などのビールもハンガリーでは人気です（アメリカのビールなどと違いハンガリークラフトビールは国外不出なので、ぜひ探してみてください）。

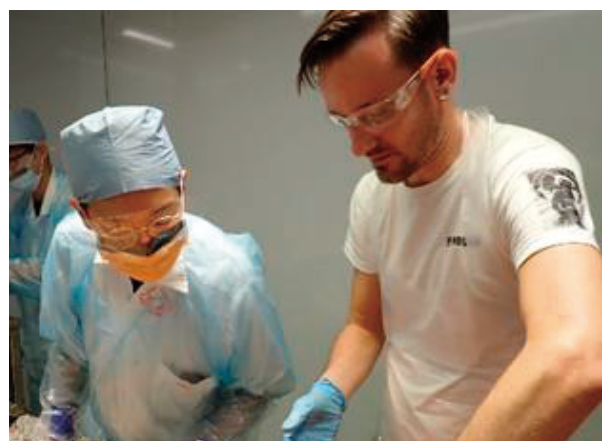


2. 研修編

今回の研修はハンガリー最大の医学部である Semmelweis 大学で行われました。Dr. Semmelweis は産褥熱の原因究明に寄与したことで知られている産科医です。今から約 250 年前、ハンガリーがハプスブルク帝国の一部であったところに、時の女王であるマリア・テレジアが国内での死亡者全ての剖検を義務とする法律を制定しました。それ以後、現在に至るまでその伝統が続いています。Semmelweis 大学では年間 2000 例の剖検症例があり、その数は日本の大学病院の約 50~100 倍に及びます。そのため、ハンガリーの病理医あるいは剖検に関わる技師は、高度な技術とマクロでの診断能力を有しています。日本との大きな違いは、以下の 3 つだそうです。マリア・テレジアに恩恵を預かる法的な背景、そして剖検費用を大学ではなく国が負担する点、そして最大のポイントとして、剖検が必要かどうかを臨床医だけではなく臨床医+病理医で判断するという点が挙げられます。ハンガリーでは日本と異なり臨床医と病理医のどちらか一方でも死因に不詳な点があると判断したら剖検が行われます（日本では剖検を行うかどうかは臨床医に一任されています）。こういった事情からハンガリーの死因統計は剖検によって高い信頼度を維持されているのです。以下は、ハンガリーの剖検で日本と異なっていると考えられる部分です。※私の 1 週間の経験に基づく記載であり、多少の間違ひはあるかもしれません。



医師は臓器の切り出しやマクロ所見の評価にのみ関与し、御遺体からの臓器の取り出しは剖検の資格を有する技師が行っています。剖検技師の技術は非常に高く、それは彼らの出で立ちにも現れています。私達の指導を担当してくれた技師の Izsó さんは年間約 1000 件、1 日最高 8 件の剖検を執刀する恐るべき技術者ですが、彼はおしゃれな PATHOLOGIA とロゴの入った T シャツにナイロンエプロンをかけ、あとはゴーグルと手袋のみで剖検を行っています。剖検時に御遺体との距離を一定に保ち、無駄な力をかけずに臓器を剖出するので、血液や体組織が飛散しないのです。また肘や前腕が御遺体に触れてしまうこともありません（我々は



日本と同じ完全防備で臨んでいましたが、徐々に軽装になっていった気がします。取り出した臓器のホルマリン固定は行わず、全てその場で切り出され評価され、必要ブロックの採取後は御遺体に返納されます。また基本的に全例開頭であり、脳も未固定のままその場で冠状断に切り出されます。よって標本として作成されるブロックは必要なものに限られ非常に少ないです（さらに PMiP コースでは時間的制約があるため全て凍結標本として作成されました。普段はホルマリン固定されています）。

また、PMiP コース中に限らず概ねその週のうちにマクロ所見に基づき剖検報告書は記載されていると思われます。圧倒的な症例数の多さが日本とのやり方の違いを生み出しているのかもしれませんが。研修は基本的に英語で行われます。ハンガリー語の発音は第1母音に必ずアクセントを置くため、ラップのようなリズム感と比較的抑揚が少ない話し方に聞こえます。そのためか、ハンガリー人の英語はネイティブスピーカーに比べ日本人にとって聞き取りやすいと感じました。

最後になりますが、この PMiP 研修は大変有意義な時間を与えてくれるものでした。剖検に関する技術やマクロ所見の取り方、剖検診断に至る明快な思考プロセスなど多くを吸収する事ができ、1日に2回の解剖を繰り返すことという日本では決して体験できないスケジュールのおかげで、ブラッシュアップ、デブリーフィングを兼ねて次へ、また次へと習得したことを忘れないうちに次の解剖に活かせるという貴重な経験ができました。また、今回は私を含めて5人で参加しましたが、非常にいいチームでした。関東、関西、中部、九州と離れた地で頑張る同年代の病理医達とのつながりを得られたこともまた、大きな成果です。

1週間とは思えない濃密な時間を終え、美しい Budapest の街並みと、そしてチームのメンバーとの別れを惜しんで、数々の思い出とワインで重くなったキャリアを持って飛行機へ乗り込みました。

